



The 2nd Annual Meeting of Japanese Society for Foot Care and Podiatric Medicine

# 第2回日本フットケア・足病医学会年次学術集会 ランチョンセミナー6

日時

2021年

12月11日(土) 12:00-13:00

会場

B会場 (G303+304 3F)

パシフィコ横浜ノース 〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい1-1-1

座長

愛甲 美穂 先生 湘南鎌倉総合病院 血液浄化センター看護責任者/フットケア外来

演者

大久保 絢香 先生 市立室蘭総合病院 皮膚科 科長

高齢爪白癬患者での  
ホスラブコナゾールの臨床効果と  
安全性の検討

～前期高齢者と後期高齢者における比較～

高山 かおる 先生 埼玉県済生会川口総合病院 皮膚科 主任部長

爪白癬蔓延防止対策待ったなし

本セミナーは事前登録制です。学会ホームページより事前にお申し込みください。  
なお、定員になり次第受付終了となります。

【\*整理券はセミナー開始5分後に無効となります。】

## 高齢爪白癬患者でのホスラブコナゾールの臨床効果と安全性の検討

～前期高齢者と後期高齢者における比較～

**大久保 絢香** 先生 市立室蘭総合病院 皮膚科 科長

【目的】爪白癬は高齢化に伴い有病率が上昇する慢性かつ難治性の疾患である。爪白癬は繰り返す足白癬の原因になることに加え高齢者においては爪の肥厚に伴う下肢機能の低下から、歩行困難や転倒などのリスクが高くなる。歩行困難は日常生活活動(ADL)の低下を招き、認知機能の低下とも結び付くため高齢者における爪白癬の治療意義は大きい。本研究では趾爪白癬患者を65歳以上74歳以下の前期高齢者の群と75歳以上の後期高齢者の群に分け、ホスラブコナゾールの臨床効果と安全性について比較検討した。

【方法】ホスラブコナゾールを1日1回1カプセル食後に12週間経口投与した患者185例を対象とし、A群(65歳以上74歳以下)とB群(75歳以上)の2群に分け有害事象及び治療効果を比較検討した。安全性については全症例を解析対象とし臨床効果は投与開始6、12、24、36、48週後の第1趾爪甲混濁比にて評価した。肝酵素が基準値の上限の2.5倍を超える患者を内服不適応とし、治療開始時と投与開始6週、12週後に血液検査を行った。有害事象はクロス集計とFisherの正確確率検定、治療効果は分割プロット分散分析と下位検定を用いて解析し有意水準は5%とした。

【結果】年齢中央値はA群68.6±8.3(65～74)歳、B群81.2±5.4(75～94)歳、男性/女性:31/33(59/62)[注:A群(B群)]。有害事象はA群で7例(10.9%:ALT上昇3例、AST上昇2例、軟便1例、嘔気1例)、B群10例(8.3%:ALT上昇4例、AST上昇3例、嘔気1例、腹部膨満1例、血小板低下1例)で出現頻度に有意差は認められなかった。混濁比の平均値は両群とも24週以降から有意な減少を示し( $p<0.001$ )、投与期間のみに有意差を認めたが投与期間別の二群比較の下位検定に有意差は認められなかった。

【結論】ホスラブコナゾールは、前期高齢者ならびに後期高齢者においても爪白癬治療薬として完全治癒率が高く、安全性が比較的高い治療法の選択肢になり得るということが示唆された。

## 爪白癬蔓延防止対策待ったなし

**高山 かおる** 先生 埼玉県済生会川口総合病院 皮膚科 主任部長

COVID-19の感染禍にあり、新しい生活様式や新常識ができ、善かれ悪しかれ生活も一変した。しかし感染対策の行き渡った状態になっても、本邦に1100万人いるとされる爪白癬患者が減るかどうかは別の問題だ。フットケアの分野にとって足爪白癬、とくに爪白癬の功罪は大きい。爪白癬により変形した爪は高齢者の爪切りを困難にし、下肢機能低下やADL低下、さらには衛生を脅かす。そして壊疽の誘因となることさえある。爪白癬蔓延のバックグラウンドには解剖学的部位、足の構造、地面と媒介するフットウェアの影響、運動不足、高齢化、など多くの要因が関与していると考えられ、蔓延を防ぐためには根気強い取り組みが必要だ。超高齢化社会をむかえ、本邦における高齢者のADLの維持は社会問題である。1. 爪白癬の啓発、2. 初期の治療介入、3. 爪変形への対応について提言し、本学会の中で爪白癬蔓延防止対策を考えたい。